

令和4(2022)年度 第64回卒業式式辞

駒場東邦高等学校第64回生諸君、ご卒業おめでとうございます。

また、本日は、関係の皆さまのご理解をいただきまして、人数は限らせていただいたものの、保護者ご家族の皆さまにご列席いただく形で、この卒業式を挙げる運びとなりました。皆さまには、ご子息の晴れの門出にあたり、お喜びも一入のことと拝察いたします。やはり、ご子息方の大切な節目の式を執り行うにあたり、その喜びを同じ会場で分かち合うことは、大変意義深いことと改めて感じる次第です。

とは言え、コロナ禍はいまだ予断を許さない状況でありますので、ご来賓の皆さまのご臨席は最小人数に抑え、学校法人東邦大学の理事長をはじめ各部署の代表の皆さまにはご臨席いただかないことといたしました。そして、何よりも、様々な場面で諸君と学びを共にした在校生諸君の参列も、見合わせることにいたしました。これらの皆さまは、言うまでもなく、諸君の卒業を心から喜び、諸君のこれからの歩みに期待をもって注目しています。その祝意を共に感じながら、この大事な卒業式を進めてまいりたいと思います。

諸君の卒業に思いを巡らせるとき、それは、どうしてもコロナ禍を抜きにしては語れないのではないかと思います。思えば、諸君の高校生活は一斉休校の中で始まったわけですが、その当時から、過去のパンデミックの例を示しながら、ひと段落つくまでに3年はかかるだろうとの見方も示されていたように記憶しています。まさにその通りになってしまいました。

コロナ禍において私たちは、前例に倣うことのできない苦しさを味わいました。諸君にとっては、学校行事や部活動などで、いよいよ自分たちが中心となって事を進めようというときに、どうしても従来どおりに実施することができない、制約だらけの状況になってしまったわけです。日々の授業を中心とした学習においても、様々な制約の中で、学ぶべきことを十分に享受できているのかという不安をいつも抱えていたことでしょう。その中で、諸君は実に粘り強く、駒場東邦ならではの学びを実践していたと思います。君たち一人ひとりが、大事にしていることと正面から向き合い、それを最大限に生かすためにはどのような工夫ができるかということに、常に真摯に取り組んできたように思うのです。それは、君たち自身にとっての成果であるばかりでなく、後輩諸君に受け継がれ、駒場東邦の新たな歴史を生み出していく具体的な動力源になっていくものです。諸君の取り組みには、改めて敬意を表したいと思います。

しかし、その一方で、堪え難い妥協を強いられたという思いが残っていて、その悔恨はどうしても消えないという人も少なくないと思います。それは自分たちの行いによるものではないのに、自分事として考えることを求められ、その不条理の責任を誰かになすりつけるわけにもいかずに、結局は受け入れるしかないという状態であったと思います。これは、広く社会を覆っていた息苦しさそのものであり、単純に意味づけして片付けるわけにはいきませんが、平準化を求める現代社会における都市生活の特徴が、クローズアップされた状況であると思わずにはられません。それは常に圧迫的であり、対立的であったと感じています。

このようなコロナ禍の側面を考えているときに、私は、《ルチャ・リブロ》と名付けた「私設図書館」を開設した若き研究者青木真兵さんと図書館司書である海青子さん夫妻のエピソードと出会いました。奈良県東吉野村という小さな山村に移住し、当地の古民家を改築して図書館を運営しているという話は実に興味深く、彼らのエッセーをいくつか読んでみました。

まず、「私設図書館」という言葉そのもの——それは、それ自体が矛盾をはらんでいる、すなわち「私」と「公」の境界領域にあるものであるという——に注目させられました。現代社会における「公」観は、人々が社会のために拠出した負担に応分の“取り分”を要求することと重なっていると、彼らは言います。なるほど、例えば公園の使い方ひとつとってみても、行政へのクレームが矢継ぎ早に寄せられ、それへの対応として禁止事項を知らせる立て看板だらけの児童公園になっている、との話題もありました。対立する者への寛容さの欠如を、如実に物語る例であるように思

います。また、彼らは《ルチャ・リプロ》を「彼岸の図書館」と呼んでいます。実際に、車では通れない専用の橋を渡って行かなければならない立地なのだそうですが、「彼岸」という言葉は、その対語としての「此岸」とを結ぶ者の存在を思わせます。つまりそれは、多様性の包摂を体現する存在——例えば「私」と「公」のような2つの対立概念の間を自在に行き来する者であり、対立的で「外部」の存在を認めない現代社会において、補完的な役割を果たす者であると言うのです。現代社会においては、人々は商品を買うことによって自由を得ているわけですが、そうすると商品を買えない人が必ず出てきて、その人たちは生きていけなくなるわけです。思えば、間もなく12年が経過する東日本大震災の際も、そのような状況はあったように思います。従来縁で結ばれた「内部」を突然失って、いまだに「外部」と縁を結び直すことができずに彷徨っている人たちが、確かにいます。現代消費社会の論理でローラー的に進められた「復興」の中で、「セーフティネット」そのものまでもが商品化された挙げ句に、その人たち自身が社会から疎外されることになってしまったと指摘する向きもあります。先月起こったトルコ南部を中心とした大地震にあっても、同じことが言えるように思います。特に、シリアの被災地においては、支援物資の供給路を増やせば良いという問題ではないことが繰り返し指摘されています。ウクライナや、その他の紛争地域にも、同じ論理が見られるでしょう。

こういった現実を思うとき、対立概念の境界領域を自在に行き来して、そもそも数値化などできない「外部」への回路を確保する場として「私設図書館」を運営している、という話には惹かれるものを感じました。さらに、対立を終わらせるのではなく、対立を続けるべきだ、と述べているのも興味深く読みました。確かに対立を終わらせるべく用いられる言説は、往々にして一方の価値観に拠った強い言説となりやすいように思います。資本の力に物を言わせて押し込め込む方法がとられているようにも見えます。対立を続けるとは、もちろん相手を傷つけ続けることではなく、対立する者がそれぞれに存在することで社会が存続することであると言うその趣旨は、わかり合えない者同士がわかり合えないままに互いの存在を認め合う、ということと似ているようにも思えます。

もちろん、資本主義に基づく社会の動きのすべてが限界を迎えていると言おうとしているわけではありません。しかし、感染症や自然災害、さらには紛争等によって不安定さを増す世界においては、境界領域の曖昧さをそのまま感受することの意義に思いを致すべきなのかもしれないと考えさせられました。

駒場東邦で、君たちは、本物に触れ、自らの感受性をもってそれを正確に捉えることに取り組んできました。そこで磨かれた君たちの感受性は、まさに境界領域の、雑多な包含物（インクルージョン）が混じり合う状態にも、正しく感応して、その状況をしっかりと捉えることができるようになっていくのです。コロナ禍において経験した、堪え難い妥協を強いられた経験や、それに伴って内心に残っている悔恨は、まさに包含物を許容するキャパシティの根拠となり得るものです。その寛容さは、境界領域において、価値観を異にする者たちと手を携えて、新たな地平を進むエネルギーを生むものとなると思います。そして、その基盤となるのは、君たちが、他でもないこの駒場東邦に集った学友たちと、それぞれの個性をぶつけ合って、切磋琢磨しながら身につけた“方法論”であるのです。

この卒業式は、それを互いに確認し合う場であると考えています。

最後になりましたが、これまでご子息方を慈しみ育てていらっしゃる保護者の皆さまへ、改めて心よりお祝いを申し上げますとともに、この六年間に賜りました本校教育活動への並々ならぬご理解とご協力に、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

64回生諸君の大いなるご活躍を、共に楽しみにしていきたいものです。

以上をもちまして、本日の式辞といたします。

令和5（2023）年3月7日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦